

特別研究会 報告

日時: 2023年8月14日(月)14:00-17:00
場所: 国際基督教大学 宗教音楽センター(本館4階)
音楽ホール および オンライン
司会: 佐藤望(国際基督教大学)
内容: 講演
共催: 国際基督教大学宗教音楽センター

Dr. Christine Blanken (Bach-Archiv Leipzig)
今日のバッハ研究: 問題と展望

【講演要旨】

バッハ作品の学術的校訂譜『新バッハ全集』、『バッハ資料集 *Bach-Dokumente*』、『バッハ・デジタル *Bach digital*』、そして最近では2022年に私がクリストフ・ヴォルフ、ペーター・ヴォルニーとともに編集した新しい『バッハ作品目録 *Bach-Werke-Verzeichnis (BWV3)*』の出版が完結もしくは完結間近である。このような今、バッハの一次資料を中心とした研究はどこへ向かうのだろうか。

2023年、バッハ・アルヒーフはドイツ科学アカデミーとともに25年計画の研究プロジェクトを開始した。すなわち、研究ポータルサイト *BACH* が設立される予定で、ここでは、音楽家一族であるバッハ家に関する17世紀から19世紀までのすべての文書にオンラインでアクセスできるようにし、注釈をつける。これによって初めて、『バッハ資料集』の文書をその重要な文脈から研究することができるようになる。これにより、J. S. バッハ本人だけでなく、バッハ一族の音楽家・作曲家としての活動を、より包括的に理解することが可能になる。

20世紀後半に盛んだった「神学的バッハ研究」は、むしろ後退している。多くの出版物があるが、権威ある研究者の多くは亡くなっている。バッハのカンタータ、受難曲、オラトリオのテキストを主に扱う新しい世代の後継の研究者が、育つだろうか。私は、クリストフ・ビルクマンを、バッハ作品の歌詞作者として特定した。この詩人は、私のさらなる研究を触発しており、私は、バッハが使用したテキスト(とその詩人をも)を、よりドイツ文学研究的視点から見る見方を強めている。ここでは、私の新しい研究について報告したい。これまでの神学的バッハ研究の通例とは対照的に、私はテキストの詩人に焦点を当てることが重要だと考えている。バッハ作品における言葉と音の深い関係についての問題、すでに十分研究され、ほとんど網羅的に書かれていると言ってもよいだろう、これらはまた別の

テーマである。

歴史的な(あるいは歴史的な情報に基づいた)演奏習慣に視線を向けると、ここでもある種の断絶が見られる。現在、これに関しては、各音楽大学で多くのことが達成されている。古楽のシーンは拡大し、歴史的な情報に基づいた演奏習慣に関する多くの知識が、通常の器楽や声楽教育にも取り入れられるようになったからだ。バッハの声楽作品の演奏は、今どこに向かっているのだろうか。それとは別に、バッハ演奏者たちの中には、即興的な要素を確立するという点で新しいものを提供したいという衝動に駆られている。すなわち、バッハのカンタータや受難曲の4部コラールの各行における間奏が、ここ数年流行している。これはバッハ時代のライブツィヒ時においても、実践されていたのだろうか。

今回の講演では、特にこれら3つの観点に焦点をあて、それぞれについて、詳しく議論し、質疑を行う機会を設ける。

Bach-Forschung heute: Probleme und Aussichten

Abstract (German)

Nach dem Abschluss (oder Beinahe-Abschluss) der wissenschaftlichen Gesamtausgabe *Neue Bach-Ausgabe (NBA)*, nach der Edition von *Bach-Dokumenten*, *Bach digital* und zuletzt 2022 einem neuen *Bach-Werke-Verzeichnis (BWV3)*, das die Autorin gemeinsam mit Christoph Wolff und Peter Wollny herausgegeben hat, stellt sich die Frage, welche Aufgaben die quellenbasierte Bach-Forschung heutzutage noch haben kann. Wohin steuert die vor allem aus Primärquellen schöpfende Forschung?

Am Bach-Archiv hat 2023 ein auf 25 Jahre angelegtes Forschungsprojekt gemeinsam mit der Akademie der Wissenschaften begonnen: Auf dem zu errichtenden *Online-Forschungsportal BACH* sollen sämtliche Dokumente der Musikerfamilie Bach vom 17.-19. Jahrhundert online zugänglich gemacht und kommentiert werden. Hier kann nun erstmalig der wichtige Kontext von Bach-Dokumenten mit studiert werden. Dies ermöglicht es, viel umfassender das Wirken der Bach-Familie – nicht nur J. S. Bach für sich genommen – als Musiker und Komponisten zu verstehen.

Die in der zweiten Hälfte des 20. Jahrhunderts so starke „theologische Bach-Forschung“ ist eher auf dem Rückzug; ein großes Korpus von Publikationen

liegt vor, viele der maßgeblichen Protagonisten sind indes verstorben. Hier fragt sich, ob an ihre Stelle eine neue Forscher-Generation heranwächst, die sich vor allem mit den Texten von Bachs Kantaten, Passionen und Oratorien beschäftigt. Der durch eigene Recherchen ermittelte Textdichter Christoph Birkmann regt derzeit noch weitere eigene Forschungen an und ermutigt, einen stärker germanistischen Blick auf die von Bach verwendeten Texte (und ihre Dichter!) zu richten. Hier möchte ich von meiner neuer Forschung berichten. Anders als es in der theologischen Bach-Forschung üblich war, halte ich es für wichtig, die Textdichter in den Blick zu nehmen. Die tiefen Wort-Ton-Beziehungen, über die bei Bach bereits – fast möchte ich sagen erschöpfend – geforscht und geschrieben wurde, sind ein anderes Thema.

Richtet man den Blick auf die historische (oder historisch informierte) Aufführungspraxis, so ist auch hier ein gewisser Einschnitt zu beobachten: Vieles ist nun an den Musikhochschulen etabliert. Die „Alte Musik“-Szene ist viel breiter geworden, da auch in der regulären Instrumental- und Gesangsausbildung viel Wissen aus der historisch informierten Aufführungspraxis eingeflossen ist. Wohin bewegt sich gerade die Aufführungspraxis von Bachs Vokalwerken? Abgesehen davon haben die Bach-Spezialensembles einen Drang, Neues zu bieten, was die Etablierung von improvisierten Elementen betrifft: namentlich Zeilenzwischenspiele in Bachs 4stimmigen Chorälen der Kantaten und Passionen sind seit wenigen Jahren nun modern. Sind sie auch historisch in Bachs Leipziger Zeit?

Vor allem diese drei Aspekte sollen in dem Vortrag beleuchtet werden - jeweils mit Möglichkeiten, ausführlich auch zu diskutieren oder Fragen zu stellen.

Bach Research Today: Problems and Perspectives

Abstract (English)

After the completion (or nearly completion) of the complete academic edition *Neue Bach-Ausgabe* (NBA), after the edition of *Bach documents*, *Bach Digital*, and the new *Bach-Werke-Verzeichnis* (BWV3), which most recently in 2022, I, together with Christoph Wolff and Peter Wollny, edited, the question arises what tasks Bach source research can still bear today. Where is the study of Bach's primary sources headed?

At the Bach Archive, a 25-year research project has begun in 2023 together with the German Academy of Sciences: on the online *research portal BACH*, which is to be created, all documents of the musician of the Bach family from the 17th-19th

centuries are to be made accessible online with annotations. Here, for the first time, the critical context of Bach's documents can be studied as well. This research makes it possible to understand more comprehensively the work of the Bach family - not only J. S. Bach - as musicians and composers.

The "theological Bach research" that was so strong in the second half of the 20th century is somewhat in decline; a large corpus of publications is available, but many of the authoritative protagonists have passed away. The question here is whether a new generation of researchers who will deal primarily with the texts of Bach's cantatas, passions, and oratorios will grow up in their place. Christoph Birkmann, a lyricist, whom I identified through my research, currently stimulates my further research and encourages a more Germanistic view of Bach's texts (and their poets!). I would like to report here on my new study. Contrary to what has been usual in theological Bach research, it is important to focus on the text poets. The deep word-sound relationships, which have already been researched and written about - almost exhaustively, I would say - in Bach, are another topic.

If we focus on historical (or historically informed) performance practice, we can observe a certain disconnection here. Much is now established at music conservatories. The "early music" scene has become much broader, as knowledge from historically informed performance practice has also been incorporated into regular instrumental and vocal training. Where is the performance practice of Bach's vocal works moving right now? Apart from it, the Bach specialized ensembles have the urge to offer something new in terms of establishing improvised elements: namely, line interludes (Zeilenzwischenspiele) within Bach's 4-part chorales of the cantatas and passions are now in fashion since a few years. Are they also historical in Bach's Leipzig period?

I will illustrate these three aspects in particular and offer the opportunity for detailed discussion and questions.

※講演はドイツ語(日本語通訳付き)、質疑応答はドイツ語、日本語、英語で行われた。

【傍聴記】(佐藤康太)

ライプツィヒ・バッハアルヒーフのブランケン氏の講演は、全部で4つのトピックに分かれ、休憩を挟みつつ質疑まで含めて3時間弱にもなる非常に情報量の多い、有意義なものだった。以下それぞれのトピックについてその情報を簡単にまとめつつ、質疑の内容や筆者のコメントを付

け加える。

1) デジタル化の現状とその恩恵

2000年頃から始まったバッハ研究のデジタル化は、現在までに急激に拡大し、特に史料に基づいた研究を一変させるに至った。楽譜史料のデジタル画像および史料に関する研究データの *Bachdigital* における一般公開は、専門家だけでなく誰もが容易にこれらのデータにアクセスできるようになったことで、誰もが史料に基づいてさまざまな判断を下すことができるようになり、また研究の検証も容易になった。NBA 改訂版もまもなく刊行が終わり、バッハ一族の作品目録も終わりが見えてきた現在、この先の史料研究の方向性が問われてきている。

2) 最新のプロジェクト「研究ポータル・バッハ」

そんな状況の中で、バッハアルヒーフが新たな長期プロジェクト(25年!)として立ち上げたのが、「研究ポータル・バッハ」である。これはバッハ一族に関連する文書史料を網羅的にデジタル化してデータとして活用することができるようにするもので、その際にはバッハの名前が挙げられている史料だけでなく、その周辺史料まで含めて対象にし、バッハ史料をその文脈まで含めて扱うことを可能にするという。むろん、膨大な史料を文字データ化して検索等を可能にするため、AIによる *Kurrentschrift* の文字認識を活用する方針であることも紹介された。

オーディエンスからも教会規定 *Kirchenordnung* はデジタル化の対象になるのか、という質問があったが(答えは否だった)、対象をどこまで広げるのかというのは難しい問題になってくるだろう。とはいえ、確かに実際の史料調査の中ですべての文書に網羅的に目を通すことは不可能に近い。それがデータ化されて解析可能になったとき、見えてくる世界は今までまったく違ってくるはずだ。25年後が楽しみである。

筆者は講演後、ブランケン氏から彼女たちが目を付けている AI 文字認識サービスを教えてもらい、少し試してみた。ドイツ語に関しては、整った書体であれば現時点でもかなりの精度でテキストデータ化が可能で、AI モデルがさらに訓練されていけば非常に強力なツールになるだろうと感じた(ただしそれでも人の目によるチェックは必須だろう)。このプロジェクトのような膨大な量の文書のデータ化に貢献するのはもちろんだが、手書き文字が史料調査における大きなハードルとなることの多い非母語話者にとっても有用な支援ツールになりそうだ。

3) バッハの詩人たち

これは彼女個人の研究で、バッハの声楽曲のテキストを書いた詩人を同定し、また彼らの関係をつぶさに追うことで、バッハがライブツイヒでどのような人間関係の中にあっただのかを明らかにするというものである。実際ブランケン氏が多数のカンタータ詩の作詞者をクリストフ・ビルクマンと同定したことは記憶に新しい。今回はそのビルクマンが自身の年巻の中に取り入れたという詩人、アドリアン・ブルンマーに関する詳細な調査の報告がなされた。またバッハの第1年巻における稚拙な詩作に関して分析が示され、それらは明らかに、洗練された詩人であったブルンマ

ーではないだろうという推測が提示された。

ブルンマーという無名の詩人のキャリア、所属した協会等を綿密に調べ上げ、それとバッハの創作環境を結び付けていく分析手腕は見事の一言である。むろんこういった研究は、しばしば「重箱の隅をつつく」などと批判されがちだが、こういった細かい調査の上に、ようやくバッハを取り巻いていた当時の社会が見えてくるということがよく分かる事例だ。

個人的には、稚拙なレチタティーヴォ詩の特徴として挙げられた、長さの大きく異なる詩行というのが果たしてどこまで「稚拙」と言えるのか、少々疑問ではあった。というのも、ノイマイスターがすでにレチタティーヴォ詩の長さは自由でいいと述べており、実際ドイツ語カンタータにおけるレチタティーヴォ詩の詩行の長さは極めて不規則であるように思われるからだ。

4) 歴史的演奏習慣

自身毎年バッハ音楽祭に携わり、最新の演奏習慣を知るブランケン氏は、現在のバッハ演奏について数多くの批判的提言を行った。トランペットに補助穴を開けて吹くことや、通奏低音にポジティブオルガンを用いることなど、しばしば問題にされる内容に加えて、近年頻繁に聴かれるようになった、コラールの各詩行の間にオルガンによる即興を差しはさむことにも史料学的根拠がないと言う。またコラールのテンポに関しては、いくつかのコラール編曲を例に、現在の演奏があまりにも速いのではないかと指摘している(筆者としては、*Kantionalsatz* によるコラールのテンポと、コラール編曲のテンポを同一と考える必然性があるのか、少し気になった)。

しばしば分断されがちな音楽学と音楽実践だが、今回のように明確に史料から言えることと言えないことを、我々専門家がしっかりと指摘していくことで、その先に新たな解釈が演奏家によって生まれる下地を作っていくことが必要だろう。

日本音楽学会東日本支部通信 第84号特別号

2023年10月13日発行

発行：日本音楽学会東日本支部

<http://www.musicology-japan.org/east/index.html>

日本音楽学会東日本支部事務局

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋3丁目3番地3号 生光ビル 303

Tel & Fax : 03-3288-5616

E-Mail : higashi@musicology-japan.org